

2023 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	後漢時代中期の通行書体に対する基礎的研究 —長沙五一広場東漢簡牘を中心に—
キーワード	①書体変遷、②通行書体、③長沙五一広場東漢簡牘

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	イダ アキヒロ 井田 明宏
配付時の所属先・職位等 (令和5年4月1日現在)	安田女子大学 文学部 書道学科 助教
現在の所属先・職位等	同上
プロフィール	筑波大学芸術専門学群美術専攻書コース卒業、同大学院人間総合科学研究科芸術専攻書領域博士前期課程修了。筆の里工房で学芸員を務めた後、2021年4月より現職。 2024年3月、博士論文「後漢時代の通行書体における新書体形成過程の書法的研究」を筑波大学に提出し、博士（芸術学）の学位を取得。専門は中国書法史、特に後漢時代の書体変遷史。 制作面では漢字仮名交じりの書を中心に制作活動に取り組んでいる。第71回毎日書道展で毎日賞（近代詩文書）を受賞。 毎日書道展会員、創玄書道会審査会員、書学書道史学会幹事、全国大学書道学会理事。

1. 研究の概要

漢字の書体は篆書、隸書、草書、行書、楷書の五つがあるが、それらは長い歴史の中で、篆書から隸書へ、隸書から草書、行書、楷書へと変遷する。この書体変遷の過程は、改まった書写状況で使用される正式書体（正体）と、日常的な書写の場で使用される通行書体（俗体）の関係の中で相互に関連し合いながら漸次移り変わる。この過程の中でも、後漢時代の通行書体における行書、楷書の発生は、隸書を中心とする旧来の通行書体からの脱却、および新興の通行書体と新書法の萌芽を示すものと考えられ、この変遷過程の解明は重要な課題といえる。

筆者はこの課題に対し、後漢時代に書写された肉筆資料に注目して、その書法を時系列に沿って分析、分類し、行書、楷書の発生過程とその要因に迫るべく検討を重ねてきた。この中で、後漢時代中期の通行書体において行書、楷書に連なる二つの系統が発生した可能性が明らかとなり、後漢時代中期の通行書体に対してより詳細な書法分析を加える必要が生じた。

本研究は、後漢時代中期の肉筆資料であり、近年、図版の公開が進展している長沙五一広場東漢簡牘（以下、五一広場簡）の書法に対し、基礎的な分析、分類を行うとともに、明らかとした書法的特徴と書写内容を関連付けて検討し、後世の新書体への系譜に基づく、通行書体の新たな枠組みを提示することを目的とする。特に、五一広場簡に含まれる公文書「君教牘」と楷書系通行書体の関係性について深く追究する。

2. 研究の動機、目的

上述のように、書体変遷史を考える上で後漢時代中期の重要性は特筆されるものであるが、その時期に書写された肉筆資料の内、図版等で確認できる資料は少なかった。2010年に発見された五一広場簡は約1万件の資料数を誇り、その空白期間を補う資料として期待されたが、

発掘後に公開された図版の数は極めて限定的であった。

そんな中、2018年より五一広場簡の全件公開が進展し、現在は2600件ほどの簡牘を見ることが可能となっている。この先、資料の公開が順次進むものと期待できることから、既公開の資料に対する基礎的な分析を行い、書体変遷の実態解明のための基盤を築くことが不可欠であると確信し、本研究を着想した。

3. 研究の結果

本研究の成果は大きく分けて次の2点である。

(1) 書法分析および分類の再検討による、各類型区分の明確化

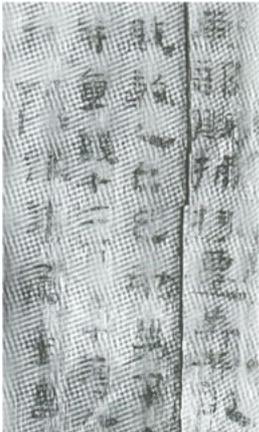
新たに公開された五一広場簡を、書法的要素（筆法、結構法、章法）から分析し、謹直さの順に従って、A～Cに大きく分類し、それを当時の書体の枠組みと照らし合わせた。具体的には、より公的な場で用いられることの多い謹直な隷書（八分）をA類、それと対照的に私的な場で用いられ、もっとも簡略化された草書をC類とし、それらの枠組みに含み難い特徴を有する一群をB類とした。新興の通行書体はB類の中に含まれる。

B類の書法を詳細に見たところ、点画の形状や結構法、章法などの相違点に基いて、より謹直な一群であるB-1楷書系と、より草卒な一群であるB-2行書系に区分することができた。また、これまではB-1楷書系と草卒な八分とを明確に区分することができなかったが、八分の要素の有無に基づき、それらを区分することができた。この成果により、後漢時代の書体の枠組みの中に、二系統の新興の通行書体を組み込むことが可能となり、後世の新書体の基盤が、すでに後漢時代中期において築かれていたことを導くことができた。

(2) 楷書系通行書体の定型化と後世への継承

前述した書法分類をもとに、各類型の書写内容を確認したところ、B-1楷書系には「君教文書」（何らかの案件（刑事事件、訴訟、物品の受理など）に対する処置案を上申し、上官、長官の許諾を得て執行する過程を記す文書）を書写した木牘（君教牘）が多く含まれていることが明らかとなった。

五一広場簡君教牘（楷書系、部分）



君教牘は案件を担当した役人たちの名が記されていることから、君教牘の書写者が特定の人物に限られないことを推測することができる。B-1楷書系における君教牘の多さと書法的共通性を勘案すれば、君教牘の書写にB-1楷書系が主に選択されていたこと、それが特定の個人による選択でなく、複数名が想定される書写者の間で共有されていたことが想定できる。これは楷書系書法の定型化を示すものとみなすことができよう。

また、三国時代、孫呉の書写資料である長沙走馬楼呉簡（以下、走馬楼呉簡）に見られる君教牘と、五一広場簡のB-1楷書系で書写された君教牘の書法を比較した結果、両者の書法が近似していることが明らかとなった。後漢時代中期に定型化した楷書系書法が、時代を超えて継承されていたと考えられる。

4. 研究者としてのこれからの展望

本研究の成果は、書体変遷史上における後漢時代中期の新興の通行書体の重要性を浮き彫りとしたといえる。特に楷書系に対して得られた新たな知見は、当時の書写者たちの書体区分の認識や、後世の新書体の形成過程に対して大きな示唆を与えるものである。三国時代の鍾繇から書聖・王羲之に至る書芸術の発展を辿るうえでも、後漢時代の通行書体の在り方は重視すべきであり、これに基づく書法史の再検討が今後の課題と言える。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

この度は本研究課題に対し、多大なるご支援をいただきましたこと、心から御礼申し上げます。本研究で注目した後漢時代の書法史は、その重要性は認識されつつも、資料的制約から研究の進展が遅れている分野であると感じています。公開された資料を最大限に活用し、基礎的な調査を積み上げながら、後漢時代の書法史の解明のために精進してまいります。